

第7回 対話イン福井 2013 報告書

報告者 針山日出夫



(11月16日、学内での懇親会)

<概要>

11月16日に福井大学と福井工業大学合同の第7回対話イン福井2013が福井工大の福井キャンパスで開催された。参加者は、双方の学生が48名、先生が5名、シニアが9名、オブザーバーが3名の総勢65名であった。真摯なグループ討論のあと、熱の入った発表と活発な質疑応答で盛り上がり、有意義で充実した対話会であった。次回は、来年11月に福井大学で開催することになった。

日時：平成25年11月16日(土) 13時～18時(有志懇親会～19時頃)

場所：福井工業大学 福井キャンパス (3号館工学実験室、307・308号室)

次第：

13:00～ 開会、参加者紹介

13:10～ 基調講演「ポスト福島のエネギー動向と原子力」：石井正則

14:15～グループ対話(参加シニア、○ファシリテーター)

Gr.1 今後の我が国の原子力全般の展望(山崎吉秀、○若杉和彦)

Gr.2 内外エネギー情勢と内外原子力産業界の動向(○針山日出夫)

Gr.3 放射線の影響/リスクと廃棄物処理処分(○清水彰直)

Gr.4 原子力安全規制(○上田隆)

Gr.5 福島原発の現状と今後(中村威、○三谷信次)

Gr.6 信頼回復とリスクコミュニケーション(石井正則、○安東桂吾)

16:50~グループ発表と質疑応答

17:40~閉会挨拶 (山崎吉秀)

参加者：

(学生側) 福井工大 38名,福井大 10名

(先生方) 福井工大：中安教授、来馬教授、吉岡教授、砂川准教授
福井大：福元教授

(オブザーバー)森(JAEA)、石山(JAPC)、富坂(北陸電力)

< 基調講演の要旨 >

演題：「ポスト福島のエネギー動向と原子力」

講師：石井正則 SNW 代表幹事

最近の内外のエネギー動向を俯瞰した上で、今回の対話会でのテーマを念頭において日本のエネギー資源環境や経済力、地球環境問題への対応も含めたエネギー選択のあり方について概説。特に、後悔しないエネギー選択を冷静に考えることの重要性が指摘され、原子力活用継続の必要性が強調された。主要な説明項目は以下。

- ポスト福島・世界のエネギー動向
- 日本のエネギー選択
- 福島事故の原因と対策、
- 福島原発の廃炉に向けた取り組み
- 福島地域の復旧・復興

<グループ対話の概要 >

(Gr.1 対話の概要)

報告者 若杉和彦

1. テーマ：今後の我が国の原子力全般の展望

2. 参加者（敬称略）：

シニア 山崎吉秀、若杉和彦（ファシリテータ）

学生 （福工大）B2 田辺、B3 井田、大津、吉田 4名、
（福大）B2 平野、B3 山田、畠山、B4 村中 4名

3. 対話の概要：シニアの自己紹介の後、学生が自己紹介と今日は何を聞きたいかについてそれぞれ発言した。それらをまとめ、主として下記の4項目について対話した。

(1) 再生可能エネギーの利用について

一般には太陽光や風力等による発電に対する期待が大きく、学生からも同

様の期待と質問が投げかけられた。シニアから、長年研究開発してきたが、せいぜい総電力の1～2%程度の発電能力しかなく、当面はとても原子力に置き換わる力のないこと、しかしさらに開発の余地はあること等を説明した。

(2) もんじゅやプルサーマル等の核燃料サイクルについて

もんじゅの位置づけや核燃料サイクルの将来的な役割等を話し合った。特にもんじゅについては、国際的にも価値のある施設であり、FBR技術を中断させるのではなく、可能な限り早く再稼働することが望まれること等を説明し、意見交換した。学生達はもともと核燃料サイクルの目的等について理解しており、十分その意義を理解してくれた。

(3) 放射性廃棄物の最終処分場について（小泉発言に関して）

最近の小泉発言（我が国では最終処分場問題が解決しないので、原発は即時停止すべきである）に関して、ほとんどの参加学生がこの問題について関心があり、多くの質問があった。シニアから、地層処分の技術的な問題は既に解決していること、高レベル廃棄物は量的に産業廃棄物の比ではないこと、しかし処分場選択に関しては過去の経験を生かして、国民参加の形態を採った実行組織を作る等検討の余地があること等を説明し、意見交換した。

(4) 原子力に関する国民の理解を得るためにどうすべきか

今後の電力安定供給のため、どうしても国民の理解を得ることが必要であるがどうするか等の質問が学生からあった。シニアから即時解決は難しいが、周囲から時間をかけて事実を説明し続けることが必要であること、また日本は広島・長崎原爆のトラウマ、義務教育で教えてこなかったこと、マスメディアの偏った報道等、今後解決すべき課題が多いことを説明した。以上

(Gr.2 対話の概要)

報告者 針山日出夫

1. テーマ：内外エネルギー情勢と産業界の動向

2. 参加者：

(学生) 山本、田之下、大橋、垣内、渡辺、石田、上田、片桐、田辺

(シニア) 針山

3. 対話の概要：

各自の自己紹介のあと、参加学生から自分の関心事や日頃疑問に思っていることなど対話テーマに拘らず対話希望項目を洗い出した。その上で、予め準備した資料（今年10月のエネ庁から出された「今後の原子力政策について」からの抜粋）を席上配布し説明した。その説明を基に更なる対話を続けた。学生たちは、情報武装が不十分である点は否めないが原子力の必要性については日頃の学校の指導などが行き届いていることもあり軸が

しっかりしている印象。他大学生の意見や同学年の意見に大変関心があり、率直な意見交換ができた。

4. 対話時の主な話題（順不同）

- － 中国、インドなどでの原子力開発動向と日本の影響力
 - － 日本の技術力に期待する新興国の状況
 - － 世界での炉型式選定動向（PWR、BWR、小型炉）
 - － 福島事故の処置が未了でも原発輸出はありか？
 - － 福島原発の汚染水と海洋汚染の状況
 - － 原発停止による影響全般
 - － 日本の生活レベルの維持のためのエネルギー選択のありかた
 - － 福島事故後のエネルギー危機の実感度（何度もあった停電の危機）
 - － 原発停止と国富の流出、貿易赤字
 - － 福島事故後のエネルギー政策の漂流
- 以上

（Gr.3 対話の概要）

報告者 清水彰直

1. テーマ：放射線の影響/リスク（人体、環境、食品）と廃棄物処理処分
2. 参加者 学生：福井工大 8名（玉村、李、加藤、齋藤、高橋、中村、前田、山本）

福井大 3名（石黒、中森、川瀬）

シニア：清水

3. 対話の概況

- 1) 学生の司会者、発表者を決定
- 2) シニアの説明：清水より資料を配布し、説明した。
- 3) 学生の提案により、議題を「食品中の放射線の影響」を中心とすることに決定

（この議題に関しシニアから説明資料を席上配布）

- 4) 学生の司会者のリードで、議題について学生一人一人が意見を述べた。
- 5) 学生が討論し、議題に関する見解をまとめ、発表した。まとめとして、

「正し知

識を身につけて、それを一般の人に伝えて安心してもらえるようにすることが大

事である」と締めくくった。

以上

（Gr.4 対話の概要）

報告者 上田 隆

1. テーマ；福島事故後の規制基準、規制行政、海外動向

2. 参加者；福井工大：上光、昇雅貴、山田、山本、吉村、治部、荒本
福井大：藤村、四方

最初 15 分ほどであらかじめ送付しておいた資料の説明を行ったのち対話を開始した。主に話題となった項目は、活断層問題、電力間の相互チェック、市民説明、海外動向等で、必ずしも当初予定されていたテーマそのものではなかった。活断層問題については、そもそもなぜ今問題とされているかについての疑問が出された。4.11 の余震による正断層活動という事実を失念しており、耐震設計審査指針の改定経緯等を説明したが、オブザーバーとして参加していた原電の社員に補足説明をしてもらった。電力間の相互チェックについては、いわゆるピアレビューをもっとしておくべきではなかったかとの意見で、WANO や原安推の活動について説明したが、後から考えれば、事故をまぬかれた東北電力のアドバイスがあれば、との含みがあったのかとも思われた。市民説明については、国や事業者による説明には理解（共感）に限界があり、市民や学生などが間に入った説明の在り方が望まれるとの意見がだされた。また、事故を受けての海外における原子力発電や規制の動向についても質問が出され、一部の国を除いて、特にこれから原子力発電の導入を計画している国においては大きな方針変更はなかった旨説明した。なお、市民説明の話題に関して、事故時の炉心冷却方法、1 mSv の問題、地球温暖化の問題等についてどこまで理解しているか確認したかったが、時間の関係などあり十分な確認はできなかった。発表は学生さん方が簡潔にまとめてくれたとも思えるが、上記のような質疑応答のまとめというより、最初の説明事項の紹介といった感もあり、対話のむつかしさを改めて感じた。なお、発表に対する質疑応答では、規制の見直し、強化内容、汚染水放出、リスクの許容等について等の説明や対話範囲を超える質問もあり回答もむつかしかったように見受けられた。

シニア側が急遽私一人となったこともあり、必ずしも的確でまとまった対話ができただとは言いかねるところもあるが、学生さんからの希望で今回の対話に当たって収集した資料や作成した資料を一式渡したので、事後にでもよく勉強してもらえればとも思われる。以上

(Gr.5 対話の概要)

報告者 三谷信次

1. テーマ：福島原発の現状と今後（汚染水問題、廃炉計画等）
2. 参加者 シニア：中村 威、三谷 信次、
学生：福工大：（1年）梶沙矢香、（3年）草崎一矢、竹下剛寛、
武市大輝、堂後光史、 畠山陵輔、（M2）滝下貴行
福井大：（D1）松橋和也、
3. 対話まとめ

最も最近の問題をテーマにした。いずれも関心は高いが、情報のほとんどはマスコミを通した形でしか受身の形では入ってこないという。専門学科の如何に関わらず比較的話題性に富んだテーマであった。学生たちの標記問題に対する認識レベルをある程度合わせるために、福島汚染水に関する20枚程度のスライドを見てもらって議論に入った。皆比較的滑らかに対話に入ることができた。議論の内容は技術的解決策よりも風評被害等に関する社会的課題に関する解決策に議論が集中した。高トリチウム濃度の処理水を希釈放出する案に対する住民の不安についてであった。メディアが連日大きく取り上げることに對しても大げさすぎるという意見が多かった。

このような風評被害が起こるのは一般市民の原子力に関する知識と関心がかけているためではないかという議論になった。そのためこのような風評が広がらないよう原子力に関する正しい知識を広めていく必要があるという結論になった。そのための解決策として

- 1) 立地地域周辺の自治体で原子力の勉強会を行なう。
- 2) 学生のころから、原子力の問題についての意識づくりが必要。
- 3) 風評被害を出さないために常にメディアと連携をとっていくなどの案が出てきた。

特に1)について、この地福井県では、すでに地域住民を集めた原子力の勉強会がずいぶん以前から行なわれてきているという。この実績モデルは他の立地地域にも紹介して広めていく価値があるように感じた。 以上

(Gr.6 対話の概要)

報告者： 安東桂吾

1. テーマ：「原子力の信頼回復とリスクコミュニケーション（地域共生、原子力報道のあり方、反対派対策も含む）」

参加者

2. 参加者（学生）福井工大：後藤（1年）、梅田（2年）、河田（3年）、
西江（3年）、野村（3年）古川（4年）
福井大：長谷（M1）、川口（M1）
（シニア） 石井（正）、安東

3. 対話概要

学生からの事前質問がなかったため、最初に自己紹介のあと、テーマに関わらず今感じていることを各学生に順次発言してもらった。

- ・ 原子力が信頼を失った原因は何か、誰のせいなのか
- ・ 原子力報道が正確でなく反対ばかりに偏っている。
- ・ リスクコミュニケーションをどうやっていくのか、効果的なやり方はあるのか

といったグループのテーマに沿った意見が多かった。

長谷君が司会者となり、自由に学生間で議論し、議論が固まったり一方的に流れないように、適宜シニアがサジェッションする、といった形で対話を進めた。

- ・ 信頼を失った原因は、福島事故後の全般的なムードにもよるが、事実により信頼を落としてもいる。報道がこれに輪をかけている面もあるが、市民一人ひとりが判断できるようにならなければ信頼回復も難しいのではないか。友人、知人、家族でよく話しをしていくことが大事。
- ・ 原子力報道が正確でなく偏っていると指摘する学生が多かった。メディアに対し怒っているだけでは仕方ない、私たちとしては、メディアの報道には誇張もあり必ずしも正確ではないと認識した上で情報に接する態度が必要ではないか。
- ・ リスクコミュニケーションの定義を出席者全員が認識した上で議論を始めた。やるにしても立地地域以外では人も集まらず難しいのではないか。またお互いの知識が共通レベルにないとコミュニケーションがとれないのではないか。リスクコミュニケーションを推進する人がいない。といった多くの問題点が指摘され、リスクコミュニケーションをどのように展開していくべきか結論は出なかった。

出席した学生は1年生から大学院1年まで広範囲にわたっていたが、年次に関係なく全員自分の意見を述べ、グループの役割分担（司会、資料作成者、発表者）を担った点は評価できる。 以上

＜参加シニアの感想・グループ順＞

（山先吉秀）

学生の皆さんへ当日の締めくくりとして送ったエールを込めたメッセージを所感として紹介させて頂く。福島の事故が起こって2年半が経過しようとしている今、改めて我が国のエネルギー問題、取り分け原子力にアクセントを置いて6つのテーマを選び、6つのグループに分かれて対話を深めていった。即ち我が国の原子力の今後の展望、世界的視野に立っての原子力産業界の動き、放射線の影響とリスク、原子力安全規制、福島の現状と先行き、信頼回復とリスクコミュニケーション。対話の成果発表を聞きながら、学生さん達夫々のグループで設定されたテーマについては勿論、我が国のエネルギー問題として理解を深められたことを感じ取ることが出来、シニアにとってこれに勝る喜びはない。

我が国が置かれている国情を振り返ってみるに、工業立国として驚異的な経済成長を遂げ先進国の仲間入りを果たし、現在の豊かな高度文明を享受する社会を築き上げてきた。今後ともこれを如何に維持さらに向上させてゆくか。現

在の安倍政権はいくつかの課題を掲げて奮闘しているところ。当面の災害復旧は言わずもがな、経済活性化と併せて国の財政健全化、外交を含めての国防、学校教育、社会福祉等々。極めて真っ当な取り組みと見るが、しかし何をさておいても忘れてはならないのは、国という集団が生きてゆくため日々の経済産業活動や国民生活の足元を支えるエネルギー戦略を確かなものにしておくこと。これこそ正にイロハにイの字である。

福島事故以来早2年半が過ぎようとしているのに、それまでに構築して来たエネルギー戦略が崩れたまま未だに混沌としている。昨年の暮れに政権与党が替わり少しは冷静な議論も出るようになって来ているとは云うものの。一方昨今、元小泉首相が極めて主張の根拠の良く分からない、感覚的な原子力ゼロ社会論を展開する場面も見られる。何れにしても政治の世界も冷静な議論を通じ一刻も早く、我が国だからこそそのエネルギー戦略を打ち立てて行かないと、この国が衰亡の道を辿ること必定である。

学生の皆さんには、今日の基調講演そして個々のテーマでの対話も通じ、我が国のエネルギー問題の理解を深めて来た。エネルギー供給手段には水力、火力（石油、石炭、天然ガス等）、原子力、再生可能エネルギー等がある。夫々の手段には夫々長所、短所があり、そこをよく見極めながら冷静な議論を重ねながら、最も合理的な組み合わせを確立してゆかなければならない。政治の世界でも行政の世界でも遅ればせながら、そうした議論が少しずつ取り交わされる様になってきている。これから益々活発化して来るでしょう。注視してほしい、そして一層エネルギー問題の理解を深めてほしい。さし当たって身近な仲間や、家族にエネルギー問題の解説が出来るように、場合によっては世間に向けても熱い情報発信が出来るようにと期待する。いずれにしても、若い学生諸君はこれからの日本国を背負って立つてゆくことになる。エネルギー問題を通して、我が国が歩むべき道を考え、模索する上で今回のシニアとの対話が何がしかの助けになれば幸いと、諸君の健闘を祈念し続けている。

（若杉和彦）

グループ1に参加したが、参加学生は全員まだ学部生であるにも拘わらず、原子力に対する理解の度合いが今まで経験した学生との対話会と比較して極めて高いとの印象を受けた。また、大学教育の中で“ディベート”の訓練を受けているようで、対話の中で積極的な質問と意見が学生から自主的に語られたことはすばらしい。特に、核燃料サイクルや原発再稼働の是非に関する話題の中で、最近の小泉元首相の「脱原発」発言に対する懸念や意見がほとんどの学生から出され、放射性廃棄物の最終処分場に関する議論にかなり多くの時間を費やした。このことはマスメディアの影響力の大きさを示しており、その姿勢が

多くの国民の意見を左右しているのではないか。原子力や放射線に関する基礎知識を持たない多くの国民をミスリードしないようなマスメディアであってほしいと思う。

福井工大から中安先生をはじめ関係者多数の援助があり、福井大を含めて多くの参加者を得て成功裏に終了したことを心から感謝したい。最近では自民党政権から数々の政策が打ち出されているが、若く優秀な原子力後継者の育成は喫緊の課題であり、その意味から大学関係者のますますのご努力に期待したい。

(針山日出夫)

3年連続で福井大/福井工大合同の対話会に参加する機会を得た。福井の地は現役時代に美浜・高浜・大飯を走り回ったことから思い出が多く、タイムスリップの感がある。

福井工大や姉妹高校の学生たちはいつ来ても、校内ですれ違うときでも活気に溢れた挨拶が飛び交い、社会人としてやっていけるだけの躰が行き届いており、清々し空気を感じる。対話会での相手に対する礼儀や発表時の質疑応答の際の態度には相手に一定の敬意を払うマナーが浸透しており好感が持てる。対話会では活発な意見がでて、それを学生たちがお互いに真剣に受け取めている。

学生たちの原子力エネルギーの必要性に対する考え方、見方は軸足がしっかりしておりマスメディアの報道に関しても冷静で客観的に受け止めている。日頃の先生方のご指導ぶりがあるものと思料。今回は海外での原子力利活用の状況を一つの視点で意見交換したが、海外で自分を試したいとの野心的な希望が出ることも期待していたが、彼らの発想は案外ドメスチックであり現実的である。

(清水彰直)

シニアの一人として学生との対話イン福井 2013(11月16日福井工大で実施)に参加しました。福井での対話は今回が5回目です。また、今回のグループは③で、テーマは「放射線の影響/リスク(人体、環境、食品)と廃棄物処理処分」です。

最初に、清水が準備した「放射線と健康」について説明しました。次に、学生の一人が司会をし、テーマを「放射線の食品への影響」に絞り、学生一人一人に発言を求め、その後、主に学生同士議論に入り、「まとめ」を行いました。

学生は、学部1年から修士2年まで、「放射線に関する知識」に幅があったようです。今回、清水が準備した資料は、短時間に学生が理解するには難し過ぎ、もう少し「基本的な知識」を含めた方が良かったと反省しています。

現在、放射能の恐怖や原発の即時停止を煽り立てる情報が一部のマスメディ

アと共にインターネットで飛び交っています。その情報の中から正しい情報を選択するには、①放射線やエネルギーに関する基本的知識の学習、②確実なデータの選択と合理的な予想の訓練、③因果関係に関して、多種多様な原因の客観的、定量的分析の実践（特定な一つの原因を感覚的に誇張することはしない）等が必要です。SNWが行う学生との対話でそのような能力が少しでも増進すれば幸いです。

（上田隆）

いつもながらのことではあるが、改めて対話のむつかしさを感じさせられた。特に、福島事故以降は、それまでのようないわば「公式論」的な説明のみではすまなくなっていると思われる。事前の質問事項の収集などを通して十分な準備をして対話会に臨むことが必要であろうと思われる。また、今回は学生8人に対してシニアは私一人といったこともあるが、学生さん一人一人の発言をうまく引き出せず、一部ほとんど発言のなかった学生さんがいたことが反省される。ファシリテーションのやり方についても今一度復習しておく必要性を痛感した。

久しぶりの対話会参加で、反省事項が多くなったが、人材育成は今後の原子力の存続にとって必須の要件であるので、これからもできるだけ参加していきたいと思う。

（中村威）

石井講師による基調講演の後、各グループに分かれ、当第5グループ（大学院生2名、6名の大学3年生と1名の大学1年生、計9人）も各自の自己紹介に続き、対話テーマの汚染水問題について、三谷シニアより、資料に基づき近況と問題点について説明がなされた。特に汚染水のトリチウムの問題や風評被害についてどのように解決していけばよいのか学生たちに意見を求めるような形で対話を進めていった。その中で正しい情報を正しく理解する、またさせるということ、どのような方法がよいのかなど、教育、マスコミなどにも問題があるなどいろいろ意見が出たもののこれといったものがなく非常に難しいものであるということになった。また、もう一つの廃炉の問題については、何かピンとこないような雰囲気ではあったが、大学などで廃炉技術、工学など、若い人たちへの教育なども必要なのではという意見も出された。今回のテーマと対話を通じて学生たちは一般の人たちに正しく原子力について理解してもらうにはその敷居はかなり高く、時間がかかるものだという事、またそれには自分たちがどうすればよいのか自身の問題として考えるきっかけになったのではと感じた。それはSNWの狙いとするところであり、原子力のみならず今後の日本

をどう考えていくのかという問題提起ができたのではないかと思うところです。

（三谷信次）

例年のことであるが、中安先生を中心として他の福井工大教授のご協力により、多くの学生たちを一本にまとめたシニアと学生たちとの対話が実現した。毎年少しずつ学生たちに会話力がついてきて、学年が上になるほどその傾向が顕著に見られた。福井工大での教授法の日頃からの成果であると確信した。司会にはM2の女性を宛がうなど、先生は表に出ないで、学生たちだけでつかえながらもその役割を何とかこなしている点は、どちらも立派だと感じた。なれない大学であれば、そそうのないよう担当の先生が強いリーダーシップを発揮して、整然と学生たちがそれについていくのであるが、そのようなところに中安先生は常に顔を出さず学生に任せて、隠然と指導されていた点には感服した。懇親会にもたくさんの学生が参加し、シニアも多くの学生たちと本音の情報交換をやっているように感じた。毎年少しずつ対話は上達していることが実感できた。

（安東圭吾）

学生との対話会に今回初めて参加しました。現役時代にその大半を若狭地区の関西電力PWR発電所の設計・建設・アフターサービスに従事してきた関係上、福井という土地柄、人柄に親しみを覚えていたことも参加した理由の一つであります。

対話会は、グループのテーマが「原子力の信頼回復とリスクコミュニケーション（地域共生、原子力報道のあり方、反対派対策含む）」という摸とした決め手のない難しいテーマでありましたが、全員がそれぞれ自分の思うところを述べ、原子力を学ぶ学生として、原子力の信頼を新たに築いていきたい、という思いが強く感じられました。

全体のグループ発表会でも学生間でプリミティブな質疑と精一杯の応答が展開され、原発立地県福井の学生の意識の高さと元気さを感じました。特に、放射線教育に関する、シニアから将来母親になるであろう女子学生への質問に対し「大人の女性、特に母親は心配性で、いくら説明されても理解できないのではないか。むしろ子供がチャント正しい教育を受け、その子供から教わりたいのが本音ではないか」との回答があり、国民に対する今後の放射線教育のあり方を示すものとして印象に残りました。

（石井正則）

学部1年から修士まで、幅広い学年の学生に参加いただいた。対話も6グル

ープそれぞれ違うテーマで、福島事故後の広範な諸問題が対象となった。基調講演ではこれらテーマを勘案し、エネルギー問題、事故の技術的な問題、廃炉に向けた取り組み、地域復興に関する問題の資料を用意したが、時間の制約もあり、説明はポスト福島のエネギー動向、エネルギー資源の選択に焦点を絞った。

対話ではグループ6の「原子力の信頼回復とリスクコミュニケーション（地域共生、原子力報道のあり方、反対派対策等も含む）」を安東さんと一緒に担当した。

情報発信と受信側の様々な問題があるが、学年の幅が広いこともあり、信頼を失った要因や対策に対する学生の意見を聞きながら、リスクコミュニケーションやメディアの問題を一緒に考えるスタイルで対話を進めた。

当初は学年の幅が広いこと、リスクコミュニケーションといた、工学教育の対象としてはあまり体系だった教育はしていない（特に低学年の場合）と思われる分野で、対話が成立するか心配した。原子力を進めるうえでは一般の方々の理解が重要なことから、原子力工学部門では、こういった領域も含めた実践的な教育を行っているようで、心配は不要であった。学生は原子力産業を自分達の将来の働き場所として期待している。危惧を抱いているとしたら、早く危惧を払拭してもらいたい。この対話もそのきっかけの一つになったら幸いである。

<閉会挨拶>

SNW を代表して山崎吉秀氏より閉会の挨拶があった。内容は前述の同氏感想分と重複するのでそちらを参照下さい。

以上